D 18　乳幼児衣料の表示に関する諸問題と着衣実態についての研究（第３報）
一着用服種別にみたサイズに関する対応の実態一

文化女大　三吉満智子　甲南女大　木岡悦子　静岡大　○大村知子
東海学園女短大　辻　啓子　相模女大　永井房子　椙山女学園大　中保淑子
京都女大　福井弥生　大妻女大人間生科研　布施谷節子

目的　乳幼児が本調査時に着用していた被服の実態を服種別、男女別に捉え、それら上衣、下衣、表着について多用されていた各服種別の使用サイズとその着用期間、大きめのサイズの着用時対応方法などについて分析をした。それらから消費者のニーズに対応するサイズのありかたや被服設計に向けてアプローチすることを目的に検討をした。

方法　調査方法は第１報で示したとおりであり、資料の概要は第１報・第２報のとおりである。本報告における解析項目は、上衣、下衣、表着の着衣の実態に関する項目とそれらの結果、上位４位までに出現した服種の使用サイズとその利用の実態に関する項目である。解析は、男女別・月齢群別に（月齢０ヵ月から12ヵ月までを４月齢群、13ヵ月から24ヵ月までは２月齢群の計６つの月齢群に分類）クロス集計した。

結果　着衣の実態は、服種や性別によって月齢群による着用が異なるものが多いが、チョッキは いずれの月齢群においても多く着用されていた。これらの使用サイズの実態からは、いずれの服種においても、６ヵ月児以下でも50、60の利用は少なく、70からの使用頻度が多かった。75、85など（所謂ハーフサイズ）の利用者は少なかった。

代表的な服種である シャツ（布・ニット）、長ズボンとカーデガンの購入サイズは、同サイズか１サイズ大きめを購入することが多く、大きめのサイズのものへの対応は、長ズボンは加工するまたは折って着せるが、カーデガンはそのまま着せるか折って着せる者が多かった。大きくても不都合点はないとの回答も多くみられた。